

# Newsletter

No. 15 September 2014

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

## 特別寄稿

### 「東京医科歯科大のチリでの活動に敬意を表して」

本年の7月30日、31日に日本の総理としては10年ぶりに安倍総理がチリを訪問されましたが、短い滞在期間にもかかわらず、昭恵総理夫人はサン・ボルハ病院を訪問され、河内講師から東京医科歯科大のチリでの活動内容、ロペス医師からはPRENECの説明を受け、また岡田助教、小林助教とも意見交換をされました。この訪問が実現したのは、医科歯科大による40年以上にわたる当地での地道な取り組みが評価されたからであります。

私はこの9月に3年間の任期を終え日本に帰任いたしました。チリは我が国にとって中南米の玄関であると感じています。スペイン語人口は約4億人存在し、その南米スペイン語圏の入口がチリであります。チリには80社以上の日系企業が進出しており、当地からペルーやコロンビアを管轄している企業もあり、またチリ豪州大使館は他の南米3カ国を管轄しています。



現在、我が国は医療技術の海外展開を官民一体となって進めています。チリは医療分野のレベルも高く、南米で2番目と3番目（CLC）にレベルの高い病院がチリにあり、PRENECで実施中の大腸がんの遺伝学的研究を行うためには最適な場所です。胃がん、大腸がん発生率の高いチリにおいて40年前から活動を展開してきたことはまさに慧眼であります。また、大腸がんの早期発見・治療をめざす中南米諸国の国家プロジェクトを支援するために、医科歯科大がチリにラテンアメリカ共同研究拠点を設置し、順次エクアドル、パラグアイへと展開していることを心強く感じます。

しかし、医科歯科大のチリでの活動に私が共鳴するのは、長期にわたるチリでの継続した活動もさることながら、海外でも臨床を重視した姿勢であります。医科歯科大の教員をチリに長期派遣し、現地の患者を直接検診することによって、日本の医療技術を中南米の医師に伝授する。己の持てる技術を持たざるものために役立たせる、そんな医療の基本姿勢をひたむきに実施されているように感じます。ひるがえって、その活動の中で蓄積された臨床データが遺伝学的研究や食文化要因あるいは比較疫病の研究にも役立つのではないかと思います。

中南米では我が国に対する信頼度は非常に高いですが、地球の裏側で地道に医療技術を伝授している医師たちの活動が、この信頼感を生み出す源泉であると思います。当地での活動を継続していくことは容易ならざる事かと思いますが、医科歯科大のこれまでの活動に敬意を表すと共に、今後の展開に期待しております。

村上 秀徳 前チリ国駐劄特命全権大使



**LACRC** TMDU IN CHILE  
Latin American Collaborative Research Center  
Santiago de Chile



## Contents

村上前大使特別寄稿.....	1
安倍昭恵総理夫人チリ訪問....	2
TMDU派遣団の活動報告.....	3
プロジェクトセメスター.....	7
LACRCの活動報告.....	10

# 安倍昭恵総理夫人チリ公式訪問

## 国立サン・ボルハ病院にて内視鏡供与式を開催

7月30日、安倍総理夫妻が中南米訪問の一環としてチリを訪問されました。安倍昭恵総理夫人は、PRENECのサンティアゴの拠点であり、本学が長年にわたり技術協力を実施している国立サン・ボルハ病院で行われた、草の根・人間の安全保障無償資金協力の内視鏡供与式に出席されました。

LACRC河内講師が、本学を中心とした日本とチリとの約40年にわたる医療技術協力関係等を説明した後、ジョレンス医師（日智消化器病研究所初代所長）、エステラ医師（同研究所現所長）、岡田助教、小林助教の4名が安倍総理夫人と懇談致しました。安倍総理夫人は、「今回の内視鏡の供与によって、チリの多くの方々が検診を受け、がんによって亡くなる方が減ることを期待します。」と述べられました。



挨拶する昭恵夫人



プレゼンテーションをする河内講師



供与式における懇談の様子



供与式後、参加者らと記念撮影

# TMDU派遣団の活動報告

本学の吉澤靖之学長、江石義信医学部長、近藤弘副学長、河野辰幸教授、北川昌伸教授、森尾郁子教授、小嶋一幸教授、植竹宏之准教授、荒木昭博講師、吉田丘事務部長、山本正彦学務部長、福井美子通訳からなる12名の訪問団が、8月10日から15日まで、チリを訪問しました。今回の訪問では、Simposio Internacional ENDOSUR(国際シンポジウム、以下ENDOSUR)への参加や、チリ大学とのジョイントディグリープログラムの打ち合わせ、PRENECの進捗確認及び今後の展開のための各種機関との面会を実施しました。また訪問団は、チリ滞在后、エクアドルを訪れ、INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON GASTROINTESTINAL TUMORS(第3回消化器腫瘍に関する国際シンポジウム)に参加しました。

また、TMDU派遣団がチリ保健省を訪問し、パラウス保健副大臣、ソト官房長と会談しました。パラウス副大臣は、今までの本学の活動に対する感謝と、今後の継続した支援を表明されました。また、JICAチリ支所、サン・ボルハ国立病院、CLCを訪問し、チリにおける活動報告及び、今後の展望を話し合いました。

## 国際シンポジウムENDOSURへの参加



本学がチリ側と共同で毎年実施してきた消化管疾患に関する国際シンポジウム「ENDOSUR」が本年も8月11日から13日までの3日間にわたって開催されました。今回は日本を始め、米国や欧州から23名の医師が演者として招かれ、消化管疾患に関する講演や研究発表を行いました。本学より、訪問団、及びLACRCスタッフ3名が参加しました。開会の辞を吉澤学長が行い、江石医学部長、河野教授、小嶋教授、植竹准教授、荒木講師、河内講師、岡田助教、小林助教がシンポジウムで発表致しました。同時に開催されたワークショップではチリにおけるPRENECの取り組みを紹介するとともに、国内外にPRENECへの参加を呼びかけました。



開会式における吉澤学長のスピーチ



シンポジウム会場にて

## チリ大学医学部および附属病院訪問

8月13日午後、国立チリ大学医学部を訪問し、ビバルディ学長、ククルジャン医学部長らと懇談しました。懇談では現在準備中の本学・チリ大学によるジョイントディグリープログラムを滞りなく進めること、今後さらに交流を深めていくことで一致しました。その後、プロジェクトセメスター学生が配属されている3研究室を訪問しました。また、同日午前には、チリ大学医学部に隣接するJ.J.アギレ医学部附属病院を訪問し、ブラゲット外科部長、ルイス内科部長らと面会したほか、病棟や検査室等の視察を行いました。



ビバルディ学長、ククルジャン医学部長らとの記念撮影



チリ大学医学部にて



プロセメ研究室視察風景



チリ大学附属病院ブラゲット外科部長との懇談風景

## プロジェクトセメスター中間発表会

チリに派遣されているプロジェクトセメスター学生による中間発表会が行われました。派遣先の指導教官や訪問団も参加し、活発なディスカッションが行われました。



松本惇奈によるプレゼンテーションの様子



稲田賢人によるプレゼンテーションの様子

## 在チリ日本国大使公邸へ訪問

8月14日夕刻、在チリ日本国大使公邸での訪問団歓迎晩餐会にご招待頂きました。会には大使館から村上大使、折原参事官、野々村書記官、山口書記官がご臨席され、吉澤学長からチリにおける活動状況と今後の展望をご説明致しました。



村上大使らと記念撮影



村上大使と吉澤学長

## エクアドル訪問

本学は2012年にエクアドル政府保健省との間に、大腸癌検診プロジェクト協力に関する覚書を締結しております。以降、拠点病院であるキト・国立パブロ・アルトゥロ・スアレス病院において大腸癌検診プログラムが進められています。また本学は覚書に基づき、年に1回、エクアドル保健省と共催で消化管に関するシンポジウムを開催しております。この度TMDU訪問団は同シンポジウムに参加するため、8月16日から19日までの間、エクアドル・キトを訪問しました。8月18日にはキト・エクアドル保健省内講堂において、第3回消化管腫瘍に関する国際シンポジウムが開催されました。本シンポジウムは本学とエクアドル保健省との共催で、2012年に始まり今回で3回目となります。本学訪問団からは江石義信医学部長、河野辰幸教授、小嶋一幸教授、植竹宏之准教授、荒木昭博講師が、LACRCから河内洋講師、小林真季助教、岡田卓也助教がそれぞれ講演を行いました。エクアドルの医師、技師、看護師等、多くの参加者による活発な討論が行われました。開会式には在エクアドル日本国大使館・小瀧徹特命全権大使を始め、日本国大使館、JICAエクアドル支所からもご臨席を賜りました。

また同日夕刻には、小瀧大使公邸にお招き頂きました。江石医学部長らから小瀧大使へ本学訪問団の活動を御報告するとともに、晚餐会ではエクアドル保健省要人と親交を深めることができました。



第3回消化管腫瘍に関する国際シンポジウム開会式



シンポジウムでの討論の様子



エクアドル保健省を訪問



在エクアドル日本国大使公邸晚餐会にて小瀧大使らと

# プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。本年度も6月9日に6名の学生がチリに到着し、うち3名がCLC、3名がチリ大学の研究室に所属しました。本号では、CLCの研究室にて研究する派遣学生のチリ滞在記をお届けいたします。

## チリ 人との出会い

稲田賢人 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属

私は、現在プロジェクトセメスターの期間にチリに派遣させていただいている、稲田賢人と申します。チリでの約3ヶ月の生活の様子について、ご報告したいと思います。

研究については、「先輩方がやっていなかったテーマをやってみよう」という思いがあり、大腸がんの新しい治療につながるOrexinというホルモン及びその受容体に関する研究を行っています。毎週金曜日のミーティングでは、英語で進捗状況をプレゼンするのですが、そこで研究室の先生方に厳しいご指摘やアドバイスをたくさん頂戴しています。その中でも、「大切なのは、聴衆に自分の研究の“story”を伝えることなんだよ」と教えていただいたおかげで、自分のプレゼンの質が上がってきていると思います。



指導教官のAnitaさんと

研究以外の生活面についてですが、はじめの頃は、全く話せない上に聞き取れないスペイン語に嫌気がさし、正直なところ「なんで日常生活を送る上でスペイン語がわからなくてはいけないんだ！」と思っていました。しかし、サンティアゴ大学の日本語学科の学生やチリ大学の学生との出会いのおかげで、その考えが変わってきました。W杯の時期にはスポーツバーでの観戦に誘ってもらったり、休日にはパーティーに呼んでもらったりと、彼らは本当に私たちのことを考えて親切にしてくれています。そんなチリ人の友達が、一生懸命に私達日本人の母国語である日本語を勉強し、そして愛着をもって日本語を話してくれるのです。そのような姿を見て、最近に

なつてようやく、「なんとかしてスペイン語でもコミュニケーションをとってみせる！」と奮起しました。外国人との交流において、互いに歩み寄る姿勢の大切さを学んだ気がします。



私達が日本食を振る舞ったパーティーで、チリ人の友達と

また、チリ人との交流だけでなく、在チリ日本人との交流の機会にも恵まれました。私は大学で硬式庭球部に所属しているのですが、チリでもテニスをしたいと思い、毎週土曜日の午前中に、日本人テニスクラブの練習に参加させていただいています。また、その練習に参加されている駐在員の方のお仕事のお話も伺うことができ、日本には関わることができなかったであろう人との出会いを通じて、どうしても医学の勉強に偏りがちであった自分の見識を深めることができているように感じます。



在チリ日本人テニスクラブの方々と

最後になりますが、現在安全で且つ充実した毎日をチリで送ることができているのは、いつも支えてくださっているLACRCのスタッフの皆様、ならびにチリに派遣して下さっているTMDUの先生方のおかげです。この場をお借りして感謝申し上げます。引き続き、チリでの人との出会いを大切にしながら、研究活動に邁進していきたいと思えます。

## Mi vida en Chile

### 松本惇奈 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属

Hola! こんにちは。クリニカ・ラス・コンデスの泌尿器科の研究室に配属されている、医学科4年松本惇奈です。

私の研究テーマは、前立腺癌の検出のために用いるPSA値に関わる遺伝子です。いま、PSAの検査の特異度が低いために、癌でない患者にも生検が繰り返される場合があります。その改善のために、前立腺癌以外で「PSA値の上昇の原因となる」と先に報告された因子の中の一つ、遺伝子のSNPIによって、チリ人のPSA値がどのように変わるのかを研究しています。

習慣や設備など、日本との違いに戸惑うことも多いですが、先生と英語で議論し、指導を受けることは日本でできないことだと思います。また、論文を読んで必要な情報をつなぎ合わせたり、100もの検体を扱ったりする中で、研究面においても多くの学びを得ています。また、私の研究室は、科は笠野・稲田の二人と違うものの、使う機材や研究する空間は同じで、二人と多くの行動を共にしています。

生活面では、先輩から紹介していただいた友人にスペイン語を習ったり、チリに留学している中学校時代の友人と再会したり、アメリカから留学中の学生と知り合ったり、チリ大医学部の学生とキャンパスで出会い観光に出かけたりと、交流の輪を広げています。さらには、友人の協力のもと、公立病院に見学に行く機会を得、同時にサンティアゴ大の糖尿病の授業を聴講しました。こうしてクリニカ・ラス・コンデスで研究しているだけではわからないこの国の側面にも触れようと努力しています。

私は1年次にスペイン語を選択せず、渡航前の講座からのスタートでしたが、ラボの他の研究員や友人と会話したい一心で、スペイン語に精一杯取り組んでいます。英語でもコミュニケーションができる相手でも、スペイン語を少しでも話そうとすると、とてもうれしそうに話を続けてくれ、距離が一気に小さくなります。英語という「共通言語」の存在に頼るだけでなく、文化や言葉の違いを受け入れ、少しでもなじもうとする姿勢の重要性を強く感じています。

最後に、私の留学生活を支えてくださっているLACRCのスタッフの皆様、TMDUの先生方、心より御礼申し上げます。また、家族、そしてチリと一緒に来ている5人の仲間に、大きな感謝の気持ちを伝えたいです。この留学は私にとってとてもかけがえのないものになっています。

留学期間も残り半分となりましたが、悔いを残さぬように過ごしていきたいと思えます。



友人とFondaに行った時の様子



Sánchez担当教官と



公立病院にて

## チリでの日々

笠野由佳 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属

6月にチリに到着して、早いものでもうすぐ3ヶ月が経とうとしています。こちらでの生活の様子を簡単にご紹介できたらと思います。

まず研究についてですが、私はクリニカ・ラス・コンデスの腫瘍学・分子遺伝学の研究室で、腸内細菌の一種と大腸癌の関係性についての研究を行っています。研究室通いが始まってしばらくは自分の研究テーマと関係する論文を読み、それらを参考にしたプレゼンをミーティングで行うというスケジュールでした。

ミーティングでは、自分の指導教員の方だけでなく他の方からもプレゼンについて多くのアドバイスを頂くことができるので、毎回学ぶことがたくさんあり大変勉強になっています。

8月に行われた第一回進捗ミーティングの前まではこのようなデスクワークが主でしたが、現在はいよいよ本格的に手技が始まろうとしているところです。

次に生活についてですが、到着後すぐに同じ南米大陸のブラジルでワールドカップが開幕しチリも出場していたため街は大変な盛り上がりとなっていました。休日に行われた試合の時はチリ人の友人とともにスポーツバーで、平日の試合の時は研究室の皆さんと研究室で一緒に観戦しワールドカップ開催期間はサッカーが生活に占める割合が大きかったように感じます。

チリが試合に勝利した時はすれ違った知らない人たちと喜び合うなど、いわゆるラテンのノリというものを身をもって体験することができました。

また、先日私はこちらで誕生日を迎えました。誕生日当日は研究室、同じくチリに派遣されている大学の友人たちそれぞれにサプライズで祝っていただきました。研究室のパーティーでは突然“Happy Birthday”の歌を「お誕生日おめでとう」とスペイン語でも英語でもなく日本語で歌われたので大変驚きました。これまで日本では真夏に迎える誕生日だったので、冬に迎える誕生日というのは新鮮でした。それだけでなく、1日に2回も誕生日を祝ってもらえるということも今まで体験したことがなかったためとても思い出に残る誕生日となりました。



研究室での誕生日パーティー

このように楽しくチリで生活を送れているのはLACRCのスタッフの皆様、医科歯科大学の先生方等たくさんの方のご支援のおかげだと思います。最後に、この場をお借りして御礼申し上げます。

こちらでの残された時間も研究、生活ともに有意義なものにしていきたいと思っています。



スポーツバーにて隣のテーブルに居合わせた人たちと



CLCのドクターヘリの前で集合写真

# LACRCの活動報告

## ラ・セレナにて講習会を開催

LACRCのメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。このプロジェクトでは、現在第5州バルパライソ、第12州プンタ・アレナス、首都州サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を用いた検診プログラムが進行中です。また第4州ラ・セレナ(コキンボ)、第10州オソルノにおいても本年中に検診が開始される予定です。

この度、ラ・セレナ市にて、北カトリカ大学主催により腫瘍に関する講習会が開催され、LACRCスタッフが講師として参加しました。

河内講師は「早期胃癌の病理分類と内視鏡治療適応」、小林助教は「食道上皮内病変における遺伝子解析」、岡田助教は「逆流性食道炎、バレット食道の診断と治療」、「早期食道癌の診断と治療」、「日本における胃癌スクリーニング」に関する講演をそれぞれ行いました。

ラ・セレナでは今後のPRENEC参加に向けた準備が始められ、LACRCスタッフも積極的に提言を行っております。

## 土屋品子厚生労働省前副大臣チリ訪問

8月6日、厚生労働省より土屋品子前副大臣がチリをご訪問され、保健省、サン・ボルハ病院、クリニカ・ラス・コンデスをご訪問されました。

クリニカ・ラス・コンデスでは、LACRCスタッフがチリ国内や南米各国における活動内容の報告を行い、土屋前副大臣からは励ましのお言葉を頂戴しました。

また、モリナ保健大臣との会談では、土屋副大臣がTMDU・LACRCのチリでの役割及び活動の重要性を強調してくださいました。



会談後、CLCIにて土屋副大臣らと記念撮影

### 編集後記

本年11月には、LACRCスタッフは2010年の設立以来最多になります。9月25日には椿教授がチリに到着しました。更に11月下旬には小田柿助教が赴任予定です。つまり、今年度中に教授1名、講師1名、助教3名の計5名体制となる予定ですので、かつてないほどにオフィスが賑やかになりそうです。今後もニュースレターを通じて、LACRCの近況をご報告してまいります。今後の誌面にあたり、皆様からご意見・ご要望等がございましたら、お気軽にご連絡くださいませ。(ウレホラ・ハイメ)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点  
Latin American Collaborative Research Center  
Newsletter No. 15, September 2014

[発行日] 2014年9月30日  
[制作] Latin American Collaborative Research Center  
Tokyo Medical & Dental University  
Clínica Las Condes  
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile  
Tel: (56-2) 2610 3780 Fax: (56-2) 2610 8610  
Email: jurrejola@clc.cl